

# A-T(毛細血管拡張性運動失調症)とエックス線

## エックス線はどんな場合に受けるべきか

実験室で調べると、A-T細胞がエックス線を浴びて受けるダメージは、正常の細胞よりも大きい傾向があります。エックス線検査による被曝量はごく僅かなものですが、理論的にはA-T患者へのリスクは存在します。したがって、エックス線検査は、治療方針を決める上で必要な場合にのみ行うことを推奨します。



## A-T患者がエックス線検査を受ける時のガイドライン

- ・ **できるだけエックス線の使用は避けてください。**
- ・ エックス線は、診断上必要な場合にのみ使用してください。

- A-T患者さんに熱や咳がある場合でも、医師の聴診上肺炎特有の音が確認できるなら、多くの場合胸部エックス線を撮らなくても抗生物質の処方が可能です。抗生物質を投与しても症状が改善されないときには、胸部レントゲン写真の必要があります。
- 手首の骨折が疑われる場合には、レントゲンは診断に必要であり、適切な治療を始める手がかりとなります。

- ・ エックス線の代替検査 (MRI や超音波検査) によりエックス線検査と同等の情報が得られることがありますので、その場合はなるべく代替検査を利用してください。
- ・ 歯科の場合、必要性の低いエックス線撮影は控えてください。ただし歯科医が歯痛などの治療に必要と判断した場合はその限りではありません。
- ・ **エックス線を使用した治療 (放射線治療) を A-T 患者さんに対して行う場合は、必ず、A-T の専門家の指示に従ってください。**